

自己評価方法について

- 1 年度当初に部署・担当(各部・学年・教科など)ごとに本年度の実践目標を立てる。
  - 2 目標に沿った取組を展開する。必要に応じて軌道修正をしながら取組を進める。
  - 3 年度末に部署・担当ごとに成果をまとめる。
  - 4 成果を踏まえながら、全教職員による評価を行う。
- それぞれの実践目標に対して、次の4つの尺度で評価する。その平均値(評価表の右端の数値)を目標ごとの自己評価とする。
- 4 達成できている      3 おおむね達成できている      2 あまり達成できていない      1 目標を達成できていない

領域	評価の観点	評価項目	番号	実践目標と成果	評価
学校運営	総務・広報・図書	家庭や地域への情報発信	1	<p>実践目標 オープンハイスクール・学校説明会の実施、ならびに総合理学科説明会や、予備校・塾の説明会等を通じて、中学生やその保護者・地域へ本校の情報を発信し理解を深めてもらう。</p> <p>(成果) オープンハイスクール・学校説明会・総合理学科説明会を実施し、多くの中学生や保護者に参加していただいた。中学校や塾での説明会にも要望に応じて積極的に参加し、神戸高校の魅力を発信した。</p>	3.4
			2	<p>実践目標 学校要覧や学校案内の内容を改訂する。さらに、各分掌の協力を得て、規程集や内規・申し合わせの見直しを図る。</p> <p>(成果) 学校要覧・学校案内を作成するにあたり、データや写真は最新のものにした。各部署において、現在の内容に合致しているか確認し、必要に応じて修正を行った。規定集や内規・申し合わせも次年度に向けて確認を行った。</p>	3.3
	総務・広報・図書	電子掲示板による職員連絡事項の共有の推進	3	<p>実践目標 グループウェアを活用して、職員朝礼の連絡事項や行事予定などの情報の共有を図る。</p> <p>(成果) グループウェアを活用して、情報共有を図った。職員朝礼も全職員に伝わるよう、マイクを使用した。電子化という点で、職員会議資料のペーパーレス化を図った。生徒全員に配布していた行事予定も教室掲示に変更した。</p>	3.4
			4	<p>実践目標 海外姉妹校との交流を通して、生徒の相互理解を深め友好親善をはかり、それら国際交流事業の取り組みを全校生にも紹介し、共有する。また、今後の海外訪問について、内容・予算等の観点から、見直しをはかる。</p> <p>(成果) 同窓会・PTAの支援を受けて、予定していた行程をほぼ計画通り実施できた。反省事項を修正して、次年度へ向け準備を始めている。</p>	3.4
	総務・広報・図書	防災教育	5	<p>実践目標 防災避難訓練や防災講話を計画し、人命尊重の精神と安全確保の意識を高め、災害発生時には教員・生徒ともに適切な行動ができる能力を高める。</p> <p>(成果) 年度当初に避難経路図を各教室に掲示し、避難経路の確認を行った。シェイクアウト訓練を1回(11月)実施した。3月に避難訓練を計画し、来年度に繋げていこうと考えている。全国各地で起こる災害に、わが事意識を持たせる習慣を身に付けさせたい。</p>	2.9
			6	<p>実践目標 生徒の自主的委員会活動を支援し、生徒購入希望書籍の配架や教師推薦図書案内などを積極的に進める。また、生徒作成の「らいぶ」や「図書館報」により読書への意欲を高める。</p> <p>(成果) 希望書籍や推薦図書の購入により、図書館の蔵書も充実していき、図書館の利用者数も多くなっている。その陰には「らいぶ」や「図書館報」による情報発信の効果があると思われる。</p>	3.1
	総務・広報・図書	豊かな探究活動を展開するための環境整備	7	<p>実践目標 探究活動やディベート等の支えとなるよう、図書館における資料の充実や、インターネット閲覧等の環境整備に努める。</p> <p>(成果) 課題研究・探究活動等で資料集めなど、図書館を利用する生徒も数多く、資料も充実している。図書の配置の工夫など、環境整備も進んでいる。</p>	3.0
			8	<p>実践目標 校務支援システムを適切に運用し、教務関連作業等の一元化・正確化・効率化を図る。</p> <p>(成果) 校務支援システムを今後さらに有効に活用できるよう機能の研究や運用方法の改善に務めた。</p>	3.2
	教務	入試業務の円滑化	9	<p>実践目標 入試業務の円滑化に努め、全職員の協力体制を強化する。</p> <p>(成果) 受検生にとって、全職員が平等に対応できるよう周知徹底を行い、個々の業務と休憩時間をバランスよく配置した。</p>	3.2
			10	<p>実践目標 前年度の進路状況について、進路指導部がその結果を分析し、職員進路研修会を実施して、全職員に提示し、今後の進路指導について研修する。さらに、3年生は、出願検討会議(12月)、共通テスト後出願会議(1月末)を行い、学年・進路指導部で検討を行う。</p> <p>(成果) 5月に新旧3年情報交換会を行い、2024年度入試の分析と本校生の指導に関する情報を交換した。6月の進路指導研修会では、79回生1年基礎学力考査の結果に基づいて過年度比較及び教科ごとに設問別の分析を行い、更に2024年度入試の大学別合否結果について職員間で情報を共有した。3年生については、12月と1月に2回の出願検討会議を行い、生徒個々の出願指導について検討した。3学期には、大学入学共通テストの結果をふまえて問題分析及び出願動向を含めた指導経過及び結果を示し、次年度に向けての指導方針を共有する。</p>	3.5
	教務	進路指導体制の充実	11	<p>実践目標 実力考査や模試の結果をもとに、毎回検討会議を開き、生徒の学力の現状を分析し、各教科が今後の授業等の指導に生かす。</p> <p>(成果) 実力考査ごとに検討会議を実施した。(1,2年は年3回、3年は5回)3年生については問題形式・難易度が異なる複数のテスト(業者模試と校内実力考査)を実施し、多面的な分析を行い、生徒一人一人の成績から各教科として取り組むべき課題や生徒の弱点を把握し、その後の指導に参考となる情報を共有した。</p>	3.4

領域	評価の観点	評価項目	番号	実践目標と成果	評価
学 校 運 営	進路指導	進路意識の向上	12	実践目標 生徒のキャリアアップの一環として、大学の職員及び外部講師を招き大学入試説明会や出前講義を実施する。また、卒業生を中心に、大学生・大学教員を招き話を聞くことで、進路の目標を明確にし、またその実現に向けてどんな道筋や方法があるのかを考えさせ、より強い進路目標の設定の手助けとする。	3.4
			(成果) 大学職員による説明会・出前講義を合計7回実施した。(神戸大・九州大・大阪大(外国語/保健看護)・京都大・九州大・東北大)そのうち、神戸大は1年生全員対象、京都大は2年生全員対象で行った。更に7月には、予備校の講師を招き保護者及び生徒対象の医学部医学科説明会を実施し、引き続き11月には医学部医学科の面接指導をグループ別を実施し目的意識を高めるとともに今後の対策を学んだ。例年実施しているキャリアアップセミナー(卒業生による在学している大学・学部の内容、高校時代の過ごし方の話)は、3学期に1,2年生全員対象で実施を予定している。		
		主体的な進路選択能力の育成	13	実践目標 3年生には、「自己実現」を配布し、1,2年生には、学年集会において、学年進路指導部の協力のもと、生徒に進路情報を提供する。保護者には、保護者会やPTA進路研修会を実施して進路情報を提供し、生徒・保護者の進路意識を高める。	3.4
			(成果) 進路決定の方針や進路に関する情報を中心に3年生向けの進路通信「自己実現」を年間約30号発行した。「自己実現」はホームページにも掲載し、保護者にも情報を提供した。2年生には「真理の翼」、1年生には「海波の夢」という進路通信を発行した。また、6月にはPTA主催の入試に関する研修会(希望保護者・生徒対象)を行い、大学入試の現状と今後の課題について情報を提供した。保護者会については、3年生で2回(7月・12月)、1,2年生で1回(10月)実施し、各学年に合わせた入試情報や進路意識を高める話を行った。		
		主体的な進路選択能力の育成	14	実践目標 各学年のロングホームルームの時間において、職業や大学を計画的に調べさせ、自己認識を深めさせるとともに必要な進路情報を収集し進路選択能力を育てる。	3.3
			(成果) 学年進路担当者が中心となって、進路ロングホームルームを実施した。1年生は職業、学部の研究、2年生は大学の入試科目の研究、3年生は検査や模試等の結果を振り返りながら希望進路実現のための研究を行った。		
	主体的な進路選択能力の育成	15	実践目標 各大学から送付されたり、訪問者が持参する資料を整理、開放して、生徒が閲覧・活用しやすいように進路資料室や進路資料掲示板(進路資料室前)の環境を整える。	3.3	
		(成果) 各大学からの資料を、生徒が閲覧、活用しやすいように整理して進路資料室を整えた。さらに、進路資料掲示板(進路資料室前)にどの学年の生徒も持ち帰れる大学情報資料を設置した。進路資料室の放課後の利用率も増えている。			
	生徒指導	伝統行事の自主的立案と全校生徒の積極的参加の推奨	16	実践目標 伝統行事の意義を全校生徒に周知すると同時に、積極的に参加できるような働きかけをアゼンブリーや集会等を通じて行っていく。	3.3
			(成果) 伝統行事の意義を全校生徒に周知するため、神高フォーラム(集会)を通じて積極的な働きかけを行った結果、生徒の行事に対する理解と関心が幾ばくか高まり、多くの生徒が自主的に参加する姿勢を示すと評価している。三大行事のフリートーキング(意見交換会)を実施し、三大行事の歴史や価値を生徒に伝えた。また、自治会や各学年の代表が主体となって行事計画を立案し、意見交換を重ねる中で、生徒間の主体性と協力意識が育まれた。結果として、創立記念祭や体育大会や音楽会などの主要行事では、全校生徒が一体となって盛り上げる姿が見られた。1月実施の震災アゼンブリーでは、震災から30年という節目でもあるので、自治会執行部員と震災慰霊行事に参加したり、それらを全校生徒に発信していくなど、積極的な取り組みを行う予定である。一方、アゼンブリーの日程調整が難しく、積極的にアゼンブリーを効果的に広報活動や神高生の自重自治の意識の高揚などに活用することができなかった。		
		自治会の自主的・自治的運営能力の育成	17	実践目標 自治会執行部の組織的な活動及び各種HR委員会等の活性化を図る。	3.1
			(成果) 自治会執行部は年間を通じて、学校行事の企画・運営を中心となって進めるとともに、HR委員会との連携を深め、全校的な活動を支える役割を果たした。一方で、特定の自治会役員や委員に業務が集中する傾向が見られ、一部の活動が停滞する場面もあった。全員が主体的に活動できる環境づくりや、役割分担の見直しが必要であると考えた。また、HR委員会の活動内容に関する生徒間の認知度を向上させるための取り組みも課題として浮上した。		
自治会の自主的・自治的運営能力の育成		18	実践目標 アゼンブリー、三大行事に関するフリートーキングの意義について全校生徒に周知するとともに、各行事の運営参加にもより多くの生徒の協力を得て、行事全体の活性化を図る。	3.0	
		(成果) 神高フォーラムでは三大行事に関するフリートーキングの意義について全校生徒に周知するとともに、創立記念祭などの行事の運営参加にもより多くの生徒の協力を得て、行事全体の活性化を図ることができた。一方、アゼンブリーの日程調整が難しく、積極的にアゼンブリーを効果的に広報活動や神高生の自重自治の意識の高揚に活用することができなかった。			
生徒の内面理解を図る生徒指導	19	実践目標 教育相談委員会との連携を密にし、職員会議や生徒指導部会等で、生徒情報の共有を図り、組織的にきめ細やかな教育活動を推し進めていく。	3.0		
	(成果) 教育相談委員会との連携を強化し、職員会議や生徒指導部会を活用して生徒情報を共有する取り組みを行った結果、生徒一人ひとりの内面的な課題や悩みに対して、組織的かつきめ細やかな支援を提供する体制を整えることができた。保護者への対応についても協力して実施することができ、安心感を与えることができた事案もあった。				
問題発生時の危機管理態勢の確立	20	実践目標 問題行動発生時に対するマニュアルを活用し、様々な事象に対して組織的に対応していく。	2.8		
	(成果) 問題行動発生時の対応力向上に一定の成果が得られたと考える。今後も継続的に改善を重ね、より効果的な生徒指導体制の構築を目指していく。一方で、マニュアルに記載されていない新たなケースや複雑な事象については、対応の柔軟性が課題として浮き彫りとなったケースもあり、今後は、マニュアルの定期的な見直しと改訂、さらに教職員の研修を通じて、対応力のさらなる向上を図る必要がある。				
教育相談体制の充実	21	実践目標 教育相談活動の周知、また、心の健康状態に興味・関心を持つきっかけ作りのためにキャンパスカウンセラーと共同で教育相談だよりを作成し発信する。支援を必要とする生徒については、学校組織・保護者・関係機関と連携しチームで対応する。	3.2		
	(成果) SCの協力のもとに月一回の教育相談だよりを作成し、生徒に配布するとともにHPにも掲載した。その成果か、昨年度と比較して、新規にSCにつなげた生徒は増加した。また、生徒指導案件等でSC、保護者、教職員との必要に応じた連携ができた。				

領域	評価の観点	評価項目	番号	実践目標と成果		評価
学 校 運 営	管理 保 健	安全 教 育 の 充 実	22	実践目標	長期休業前には、部活動での救急時に対応できるような生徒を対象に救急法講習会を行う。教職員対象の救急法講習会は、『いつでも、誰でも行動できる』ためのシミュレーション研修を深め、知識・技術を習得する。	3.2
				(成果)	学校全体で安全教育の充実が図れるように、実施方法や実施機会を工夫できた。また、救急時にすみやかに適切な対応ができるように具体的な方法を提示し、部活動に関わる生徒や教職員に広くその知識と技術を習得を促すという目標を達成した。	
		教育環境の向上と美化活動の推進	23	実践目標	屋内だけではなく、屋外の清掃にも適宜人員を配置して学校全体の美化に努める。清掃道具の刷新を順次行い、清美委員とも協力して日常の清掃での美化が徹底できるようにする。	3.1
				(成果)	清掃道具を適宜補充しながら、校内の美化に努めることができた。今後は生徒たちと知恵を絞って、フロアの汚れを落とす手順や方法などに工夫をするなど、一層の環境整備を図りたい。	
		総合理学科の カリキュラムの充実	24	実践目標	グローバル人材育成をめざし、コアになる力としての「問題を発見する力」「未知の問題に挑戦する力」「知識を統合して活用する力」「問題を解決する力」、ペリフェラルとしての力としての「交流する力」「発表する力」「質問する力」「議論する力」の8つの力をよりよく伸張するための授業改善を図る。	3.4
				(成果)	8つの力の育成は、総合理学科の中心の目標である。この目標の達成を目指して今年度は、予定していた活動を含め、シンガポールの海外の研修や発表会等を昨年に続き行うことができた。また、各教科も実験機材や発展的内容を含めた教材を活用した授業展開を行うことができた。	
		創意工夫を生かした 探究活動等の実践	25	実践目標	交流・議論・発表等を軸とした生徒の主体的・協働的な研究活動・探究活動の効果的なカリキュラムの開発とその実践を行う。	3.5
				(成果)	外部人材の活用を積極的に行い、サイエンス入門や課題研究では、いろんな視点からの助言をいただき、生徒自らの研究活動に生かすことができた。また、SSH特別講義やSSH特別実験会およびSSH通信による各種プログラムの案内などもできるだけ行い、主体的・協働的な活動へにつながる機会を多くした。そして普通科の神高探究の文系・理数系テーマも充実しており、特に理数系テーマを「サイエンス探究」としてSSH事業の対象として支援した。	
		在校生と中学生、その保護者への総合理学科の広報	26	実践目標	在校生とその保護者に対しては、保護者会やSSH通信や神戸高校ホームページを活用して広報をおこなう。また、中学生とその保護者には、総合理学科説明会や校外での説明会で、学科の特色や魅力を説明し、理解を深めてもらう。	3.4
				(成果)	総合理学科説明会を行い、その中で総合理学科3年生の各班から研究発表を含めた活動の説明も行い、中学生やその保護者に丁寧な広報を行うことができた。また、校外での広報活動も行い、参加された中学生やその保護者に、本校のホームページの紹介、SSH通信などSSH事業を含めた本校および総合理学科の育成目標や活動内容を詳しく説明した。在校生においてもSSH通信等を通じて各種プログラムの案内を行った。	
	SSH事業の推進と成果の全国への普及	27	実践目標	自らの興味・関心に応じてテーマを設定、探究活動を行うことで探究の方法、考え方、知識等を身につけさせる。また、グループ活動を通して協働性を養い、発表会などを通して外部へ発信するプレゼンテーション能力を育成する。	3.5	
			(成果)	サイエンス入門・課題研究・神高探究等の探究活動、科学英語等の授業、SSH特別講義や外部施設への見学なども例年の形で、リモートも含め、多様な外部人材を活用することができ、人材育成の効果を高めることができた。SSH特別講義やSSH特別実験会も多く行い、全校生が参加できる企画を実施した。SSH事業普及のwebページも随時更新を行い、閲覧数も増加し、全国へのSSH事業の普及として発信した		
学 年 経 営	第 1 学 年	28	実践目標	神戸高校生としての自覚を持たせ、基本的な生活習慣と礼儀・マナーの確立を図る。生徒の現状を把握し、家庭との連携を密にして、生徒の個別対応を大切に指導を行う。	3.4	
			(成果)	各担任が家庭との連絡を密にとり、生徒個々の状況に応じた対応をした。		
		29	実践目標	中学生からの気持ちを切り替えて、適切な課題に取り組ませたり、予習・復習を習慣化させることにより神戸高校の授業に慣れさせる。iPadも活用して情報リテラシーを意識させる。さらに、個々の学習目標を立てさせ、状況に応じた自主的で主体的な学習のあり方についても考えさせる。	3.3	
			(成果)	入学後、SNSの扱い方について外部講師を招き講演会を行った。マネージメントプリントを利用して、定期考査や長期休業中の学習計画や学習目標を立てさせた。		
		30	実践目標	学習と合わせて、部活動や学校行事に、自主性・自律性の涵養を図りながら意欲的に取り組ませ、一人一人が生き生きとした学校生活を送れるよう適切に指導・助言を行う。	3.5	
			(成果)	六甲宿泊登山も無事に行えた。委員長を中心に企画・運営する学年行事を行うなど、各種行事においても積極的に取り組むことができた。		
	第 2 学 年	31	実践目標	3月末に行ったアセスメントテストを基に、1年時の学習内容を振り返り、基礎・基本の定着を徹底すると同時に、3年生に向けて応用力の養成、将来の進路決定に向けての意識付けを行う。	3.3	
			(成果)	機会があるたびに基礎基本の大切さを伝え、小テスト等を通じて基礎力の養成につとめた。また、鉄緑会、京都大学から講師を招き講演をしていただくなど、進路決定に向けての動機付けを行った。		
		32	実践目標	高校生活の中心となる学年であることを意識させる。文化祭・定期戦などの学校行事、部活動に積極的に参加することにより、リーダーとしての資質を養う。	3.3	
			(成果)	コロナ禍で行われていなかった園遊会で、係の生徒をリーダーとして様々な工夫を模擬店を成功させた。また、部活動の中心的存在として様々な成果を収めた。		
33	実践目標	学校という一つの社会の中で、他人を思いやる心を育むとともに、各行事において、他者と協力して物事をやり抜くことにより社会性を養っていく。	3.3			
	(成果)	文化祭や修学旅行等の行事を生徒主体で企画運営するなかで、コミュニケーションをとり協力し合うことを学び社会性を養った。				
34	実践目標	最高学年としての責任感をもって、諸学校行事に取り組ませる。本校の教育活動を大切に、神高生として相應しい学校生活を心がけるように指導する。	3.5			
	(成果)	部活動や委員会活動を最後までやり遂げるとともに、学校行事への積極的参加や日常の学校生活を大切にさせるようにした。				

領域	評価の観点	評価項目	番号	実践目標と成果		評価		
課題教育		第3学年	35	実践目標	ウイークエンドセミナーや学期中・夏季休業中の補習の実施、などによって自主的な学習態度を育成し、学力の飛躍的向上を図る。	3.5		
				(成果)	学習状況を把握し、個々の学習への取り組み方を考えさせた。夏季休業中の補習等の実施により、学力の更なる向上を図った。			
			36	実践目標	個人面談や三者面談を通じて、「自身が大学で何をなすのか」について考えさせた上で希望進路を確定させ、「第一志望大学合格」の意志を定着させる。進路保護者会や「自己実現」の発行を通して入試制度や大学の情報を知らせ、保護者の協力と理解を得て、第一志望校への出願を図る。	3.5		
				(成果)	二者・三者面談を複数回行って進路を考える支援をした。早期から「第一志望大学」の目標を設定し学習に取り組みさせることで、学力向上を図った。進路指導部の協力のもと、進路情報を保護者と共有することに努めた。			
			人権教育	人権教育推進体制の確立と人権教育の推進	37	実践目標	人権教育をホームルーム活動をはじめとして全ての教育活動に位置づけ、全教職員で取り組む。	2.9
						(成果)	人権アンケートや生徒への個人面談を行い、生徒の状況把握に努めた。地理歴史、公共の授業での啓発、講演会や映画鑑賞を行い、人権意識の向上を促進した。	
38	実践目標	教育実践の効果を高めるために、ICT機器を活用する環境を整備するとともに、授業等で効果的に活用できるように技術的な支援を行う。			3.3			
(成果)	○ICT機器を活用する環境整備(県で整備されたもの以外について) 生徒:全生徒がiPadを所有する初めての一年であった。全生徒がロイロノートのライセンスを購入し、授業や課外活動等幅広く活用している。 教室:AppleTVを3年生HR教室に導入した。特別教室でも使えるよう購入を進めた。 教師:surfaceの回収に伴い、iPadの貸与を進めた。必要な教科はデジタル教材を導入しており、生徒用のライセンスの購入やアプリの一斉配信を行った。教師が授業で活用するアプリの導入については、個々に対応した。 ※「ネットにつながりにくい」「業務用PCの起動が遅い」という回線・機器の環境整備の課題については何度も声が上がってきたが、県全体の問題であるため校内の一部署で対応できることではない。回線が混みあわないよう分散して使用する、不要なアプリをオフにする、など、できる範囲でのみ対応した。 ○ICT機器の活用の技術的な支援:教師・生徒ともお互いに情報交換をしながら、これまでに以上に各種アプリを活用している。一方で、ID・パスワード忘れ、機器の不具合や紛失、目的達成のためのアプリの活用方法の相談など、対応は多岐に渡った。同じような質問が想定される場合には事前に文字資料や動画資料を作成して対応の効率化を図り、新規課題への対応に当たれるようにした。							
ICTの活用と情報発信	生徒の学習活動を家庭・地域へ情報発信	39	実践目標	発信者が学校の情報を適切に発信でき、受信者が必要な情報を探しやすくなるよう、学校のホームページ全体を見直す。	3.2			
			(成果)	学校のホームページ作成を業者に依頼し、12月までに新しいデザインのホームページを制作した。教師・PTA・生徒から現状の課題を聞き取り、「①見にくい、見つけにくい」「②情報が古い」「③デザインから本校の魅力が伝わらない」という課題に対し、その解決を図った。また、「④ホームページを閲覧するターゲットとして、中学生とその保護者を第一、在校生の保護者を第二とし、それにふさわしい情報提供、デザインをめざす」とこととした。 ①:サイト内検索機能の搭載、および、すべての情報トップページから3クリック以内で到達できるよう工夫した。②:校内全部署をあげて掲載内容の見直しを実施した。③:トップページの印象が学校の印象を決めるというコンセプトで、インパクトのあるトップページ制作に取り組むとともに、学校のカラーであるセルリアンブルーを基調とし、落ち着いたデザインを心掛けた。④:情報の受け手を強調して明記したメニューを作成した。				
特別支援教育	特別な配慮を必要とする生徒への支援	40	実践目標	生徒の実態把握や具体的な対応策の検討を行うとともに、職員間の連携を密にし、教育的ニーズに応じた合理的配慮ある支援を行う。	3.1			
			(成果)	委員会を適宜開催し、問題を抱える個々の生徒の状況を把握するとともに、それぞれの生徒に応じた配慮と支援を行えた。				

領域	評価の観点	評価項目	番号	実践目標と成果		評価
				実践目標	(成果)	
教科領域	国語	国語	41	実践目標	論理的な文章の読解を通じて、思考力・判断力を養う。また文学的な文章の鑑賞を通して豊かな心を育てる。	3.3
				(成果)	教科における学習活動全般を通じて、論理的な文章や文学的な文章を読解するために必要な国語力を養成した。また、言語活動を授業に取り入れ、思考力や判断力を一層高めることができた。	
		42	実践目標	古文・漢文読解の基本となる知識の定着を図りつつ、さまざまな作品にふれることを通じて、古典への関心を育てる。	3.2	
			(成果)	古典作品を読解するために必要な基本的な知識の定着に努め、多くの古文・漢文の作品を読む学習活動を通じて、古典に親しみ、古典からさまざまなことを学ぶ姿勢を身につけることができた。		
		地理歴史・公民	43	実践目標	現代をよりよく生きるために、政治・経済の仕組みや、現代世界の理解を深める。学習を通じて、基本的な知識を身につけ、物事を見つめる力を育てる。	3.5
				(成果)	講義形式の授業を中心に演習を加えながら、基本知識を習得した。ICT機器を活用することで、幅広い情報に触れられ理解を深めることができた。	
	44		実践目標	日本の歴史、世界の歴史を学び、現代社会における国際問題を考える基本知識を習得する。	3.5	
		(成果)	講義形式の授業を中心に演習を加えながら、基本知識を習得した。ICT機器を活用し、地図や資料など必要な情報を提供して、わかりやすい授業を実施し、理解を深めることができた。			
	45	実践目標	日本の社会・風土の理解を深めるため、各国の自然環境・社会環境を学び、基本知識を習得する。	3.6		
		(成果)	講義形式の授業を中心に演習を加えながら、基本知識を習得した。ICT機器を活用し、地図や資料など必要な情報を提供して、わかりやすい授業を実施し、理解を深めることができた。			
	数学	数学	46	実践目標	数学的な考え方を身につけさせ、生徒が主体的・能動的に学習する態度を育てる。	3.5
				(成果)	生徒が興味をもつような補助教材を用意したり、グループワークを取り入れ、生徒が主体的に学び考え、能動的に発表・意見交換ができる授業を展開した。	
			47	実践目標	生徒の進路・能力・適性に応じた授業・補習・課外活動を実施する。	3.5
	48	(成果)	3年では、すべてのクラスについて一部の授業で能力別・進路別のクラス分けを行った。1、2年でも生徒の学力にあわせた授業・補習・補充を行った。	3.2		
		実践目標	生徒の興味・関心・意欲を抱けるような教材・教具を工夫し活用する。			
	(成果)	PCやiPadを用いて、図形や関数を、能動的に表現することで、興味関心を抱けるようにし、理解を深めることが出来た。	3.7			
		実践目標		プリント教材、資料集を活用した授業実践と授業内容の工夫を行い、基礎学力および応用力の向上を図る。		
理科	理科	49	(成果)	主体的に授業に参加し、グループワークなどでも活発に意見を交わした。基礎知識が定着し、応用力が向上した。	3.5	
			実践目標	実験・観察の報告書の作成し、知識・技能の定着と思考力・判断力・表現力の向上を図る。		
		50	(成果)	実験では反転学習も取り入れ、生徒はしっかりと予習した上で実験を行い、より理解を深めることができた。また、研究活動につながる視点で報告書を書くことだ出来るようになった。	3.5	
51	実践目標	工夫された教具、ICT教材等を活用し、科学・技術に対する幅広い興味・関心を持たせる。	3.5			
	(成果)	タブレット端末を活用した反転学習や、授業の中で動画やアプリを用いた教材、クリッカーなどを効果的に取り入れ、生徒の興味関心を高めることができた。				
保健体育	保健体育	52	実践目標	新体力テスト等を実施し、自己の体力の変化に気づかせ、3年間を通じて基礎体力の向上を図る。体育委員のリーダーシップのもと主体的協力的に行動できる力を身につける。	3.3	
			(成果)	毎時間実施している周回走(男子1500m、女子1200m)を通じて、持久力および精神力が向上し、意欲的に基礎体力の向上に取り組む生徒が増加した。一方で安易に授業に遅れてきたり、体調管理不足から授業への見学者も見受けられた。		
53	実践目標	選択種目を通じて生涯にわたって運動に親しむ資質や能力を育てる。学習ノートや振り返りノートを活用し、主体的・対話的で深い学びが達成できるように努力する。	3.4			
	(成果)	生徒は可能な限り自分が得意とする種目を選択し、競技の技能向上に大切な点を考えさせ、チームスポーツに必要なコミュニケーションの必要性を意識するようになった。授業のあとに提出させる振り返りノートで、自らを省みて成長に繋げた生徒も増えた一方で、振り返り作業がなかなか進まなかった生徒も一定数見られた。				
芸術	芸術	54	実践目標	生涯にわたって、広い視野で芸術との関わりを大切にしようとする心情を育てるとともに、実技・実習等で幅広く主体的に取り組む姿勢を育てる。	3.5	
			(成果)	様々な分野にわたって実技実習を行うことにより、主体的に生涯にわたり芸術活動を大切にしようとする姿勢、心情を養うことができた。		
外国語(英語)	外国語(英語)	55	実践目標	教科指導を通して、国際感覚を持った人材育成に努める。	3.4	
			(成果)	国内外の諸問題に関わる新鮮な教材に触れ視野を広げた。英語を読む、聞くなどのインプット活動だけでなく、学んだ内容を記述したり、発表したりするなど、多様な方法でアウトプット活動を経験させた。異なる考え方や文化的背景を持った人々との議論を通して、国際人としての行動力や寛容さを身につけた。		
		56	実践目標	生徒のニーズに配慮した授業や個別指導を通して、学力の向上と定着を図る。	3.5	
			(成果)	各考查結果や、課題提出状況、日常の授業中の様子などに気を配り、授業や課題の内容、実施方法などの改善を行った。ていねいな添削やこまめな声掛けを通して、学習への意欲が高まるようにした。		
57	実践目標	外国人外国語指導助手や視聴覚教材を有効に活用し、4技能5領域(読む、書く、聞く、発表する、やりとりする)の養成に努める。	3.5			
	(成果)	ALTについてはTeam・Teaching授業を中心に、プレゼンテーション、スピーチコンテストやディベート大会などの指導においても積極的な活用を行った。ICT機器を日常的に使用して動画や音声教材などを提供するだけでなく、自身の英語を発信させたりもした。				

領域	評価の観点	評価項目	番号	実践目標と成果	評価		
		家	58	実践目標	人生100年時代を見据えて、ライフデザインの必要性を見出す。社会の一員として、より良い人生を築くために必要な基礎的・基本的知識・技術を習得し、生活力を身につける。持続可能な社会を形成し、消費者の立場として地域社会に貢献する力を養う。	3.6	
				(成果)	学習活動全般を通じて、持続可能な消費生活の実現に関連付けた内容を取り上げ、考察ができるように学習を進めた。主体的な消費者として適正な選択と判断する力を養い、その力が社会全体の消費行動に繋がることを理解した。		
			59	実践目標	実験や実習などを通して実践力を育み、ものごとを構成する力や、論理的・科学的な思考を育成する。また、グループワークなどで意見を交わし、多様性を受け入れる考え方を学び心を育む。	3.5	
				(成果)	調理実習では一人実習、二人実習、グループ実習を取り入れて、様々な形態で実習することで、個人の技術やグループでの協働力を向上することができた。衣生活分野の実習や実験では、創造力を生かしてハギレを使った作品を作ることで持続可能な衣生活について、理解を深めることができた。		
			60	実践目標	様々な分野で外部講師の講義を積極的に活用しより専門性を高める。外部講師授業を通じて、将来の生活設計を考える力や日本の食文化を実習の中で体得し、伝統文化を継承する力を育む。	3.5	
				(成果)	衣生活、金融教育、食生活分野で外部講師とのTT授業を取り入れた。専門的な講義や実技から学習の意欲が高まった。講師の職業に対する考え方にもふれ、職業観の育成にも繋がった。金融教育では、リスク管理や人生100年時代のライフプランニングの大切さを実感することができた。		
		情	報	61	実践目標	情報を科学的に理解させる。情報及び情報技術の活用能力を高める。情報社会に参画する態度を学ばせる。これら3点が目標である。	3.6
				(成果)	SSH事業の方針に含まれる「SSH事業の成果の普及」に沿って「問題解決・探究活動への接続」を重視しつつ、共通テスト対策も含めて授業を展開した。問題発生を軽減する目的で「情報社会に参画する態度」関連は1学期に指導し、例年通り「夏休みに生徒がネット上の問題を起こしたり巻き込まれる事例が発生しにくい」という成果が引き続き得られているはずである。「科学的な理解」をねらいとする論理演算・回路・デジタル表現・ネットワークの理論等は2学期に実施し、「問題解決や探究活動」を踏まえた理論・統計的手法は2学期後半から3学期に教科書を超えた内容を指導するので、3学期には効果が生じると考えられる。共通テストで情報が出題されることになり、一昨年から教科書の内容が大幅に増加して授業時間は不足しており、実習は大幅に軽減せざるを得ないが、情報を礎にした知識・技能・思考判断・データ分析等を、短時間のPC活用実習も含めて指導中である(全て12月時点の状況)。		
		総合的な探究の時間(神高探究)の展開と活用		62	実践目標	自らの興味・関心に応じてテーマを設定、探究活動を行うことで探究の方法、考え方、知識等を身につけさせる。また、グループ活動を通して協働性を養い、発表会などを通して外部へ発信するプレゼンテーション能力を育成する。	3.3
				(成果)	1学年に神高探究Ⅰとして、プロジェクト探究Ⅰとして探究の基礎を学習した。また、プレ課題研究とその発表会も実施した。これは2学年での神高探究Ⅱにつながる学習となり、神高探究の実践目標の基礎ができた。2学年では神高探究Ⅱとして、本格的な探究活動を行い、8クラス69テーマとなった。中間発表や最終発表会および代表の外部の発表会を通じて8つの力の目標の育成となり、研究能力はもちろんのこと、協働性やプレゼンテーション能力の修得になった。		